

オメル・バルトラ
橋本伸也 訳

ホロコーストと ジェノサイド

ガリツィアの記憶からパレスチナの語りへ

岩波書店

ホロコーストの記憶をパレスチナの痛みとともに

語ることはできないのか——

イスラエル生まれのジエノサイド研究の第一人者が、自身のホロコースト研究とガリツィア(西ウクライナ)にルーツのある自分史を重ねて、パレスチナの今へと語りつなぐ。人道的なオピニオンや社会活動でも知られる著者が、記憶の政治化や「唯一無二」性の強調によって桎梏化されてきたホロコースト研究に風穴をあけ、新たなナラティブの可能性を探る。イスラエル・パレスチナの共感的理解を希求する、渾身のメッセージが詰まった最新論集。日本語版特別編集。

Genocide, the Holocaust and Israel-Palestine:
First-Person History in Times of Crisis

by Omer Bartov

Copyright © Omer Bartov 2023
All rights reserved.

First published 2023 by Bloomsbury Publishing Plc., London.
This Japanese edition published 2024
by Iwanami Shoten, Publishers, Tokyo
by arrangement with Bloomsbury Publishing Plc., London.

日本語版へのまえがき

私は、岩波書店が本書の日本語版の出版を決められたことを嬉しく思うとともに、橋本伸也教授の丹念な翻訳作業に感謝申し上げたい。日本の読者に向けたこのまえがきの目的は、イスラエルとガザにおける最近の出来事について最新情報を提供するとともに、長く苦痛に耐えてきたこの地域のために私たちが描きうる何らかの未来のシナリオにとって、これらの展開がどのような意味を有するのかを考えることである。

本書の英文による原著は、二〇二三年一〇月七日のハマースによるイスラエルへの襲撃の二カ月前に刊行されたが、この襲撃は、地域全体とこの地域の紛争に深刻な影響を及ぼした。だが、想起しておくべきなのは、イスラエルのユダヤ人とパレスチナ人の間の関係は、現在の危機に先立って何年にもわたり悪化を続けていたということである。事態が特に深刻化したのは、二〇二二年末にイスラエル政治上もつとも過激な右翼勢力との連立によりベンヤミン・ネタニヤフ政権が成立して以降である。そのひとつの帰結が、イスラエル国内のパレスチナ人の暮らす地域で急増する犯罪的暴力とギャング的抗争をイスラエルの警察がほぼ完全に無視したことであり、これがアラブ系コミュニティ内の不安を著しく高めた。もうひとつは、占領地である西岸地区のパレスチナ人コミュニティへの入植者と軍による暴力の増大だった。両者とも、一〇月七日以降にさらに悪化した。

新政権の試みた「全面的司法改革」も、ユダヤ系イスラエル人社会内の緊張を新たな高みに導いた。毎週行われる大規模デモが要求したのは、行政権力による司法の乗っ取りと思われるものからイスラエルの民主主義が守られねばならないということだった。私自身も加わって何人かの同僚たちが二〇二三年八月四日に発出し

た公開書簡で指摘したとおり、イスラエルの最高裁判所を弱体化させるこの試みは、主として西岸における抑圧的占領政策の強化策と連動しており、最終目標は西岸地区の民族浄化と併合にあった。だが、抗議する人々のほとんどが懸念したのは、世俗的でありベラルなイスラエル市民としての自分たちの権利への脅威だけであり、占領の問題を取り上げるのは拒否していた。実際、イスラエルのこの種の人々と、成長中の右翼的・宗教的な多数派との間でギャップが拡大していたものの、ネタニヤフが多年にわたって論じてきた通り、一〇月七日以前のイスラエル社会には、パレスチナ問題は経済的・軍事的・政治的コストをさしてかけずとも操作可能という全体としての合意があった。分離壁とバイパス道路の向こうにパレスチナ人住民を閉じ込められたのだから、大半のユダヤ系イスラエル人にとっては占領の野蛮な現実を無視することがよりいっそう容易になった。

私たちの請願公開書簡で指摘した通り、占領を直視することは、イスラエルの民主主義が抱える根本の難問を克服するうえで中核をなすことである。現在、イスラエル支配下に置かれたヨルダン川と地中海の間の上地には、今なお民主主義を享受する七〇〇万人のユダヤ系市民と、民主主義的権利を一切持たず、あるいは二級市民扱いの七〇〇万人のパレスチナ人が暮らしている。その結果、西岸地区——二つの民族集団がまったく異なる法体系下に暮らしている——ではアハルト・ヘイト体制がすでに登場し、他方、ハマース統治下のガザ地区はすでにイスラエルの包囲にさらされてきた。だが、私たちの請願は、国際的に傑出した学者数千人の署名を集めたものの、イスラエル自体にはほとんど効き目がなかった。

そうした時にハマースの襲撃が発生し、過去の理解と未来への思いを一変させた。イスラエルのリベラルなユダヤ人の多くは、酔い覚まし¹の過程として語られるものを経験した。これは、従来抱えてきた平和と和解への希望という幻想から目覚めることを意味し、パレスチナ人は「たんに私たち全員を殺したいだけだ」と認識した²、ということである。イスラエル右翼の側ではハマースの襲撃を、ヨルダン川から海に至る土地全体で併合・入植を行い、パレスチナ人住民のすべてを除去する必要がある³に確証された機会だと捉

えた。

当初、パレスチナ人はハマースの襲撃を、軽武装の数千人の武装勢力がイスラエル国防軍の面目を潰したものととして歓迎し、かなり誇らしく感じていた。西岸地区における国防軍や入植者の暴力への深い無力感や徹底的な脆弱さの感覚、イスラエルによるガザ包囲にさらなる貧困と絶望を強いる中、長年にわたりフェンス越しで豊かなユダヤ人コミュニティを目にしてきたこと、こうしたことを考慮すれば、占領地のパレスチナ人によるこの反応はおよそ驚くようなことではない。イスラエル国内のパレスチナ人市民は、隣人であるユダヤ人の怒りの激しさと復讐衝動をよく知るだけに、自分たち自身の安全への不安をますます募らせて表現した。大学のような日常的にユダヤ人とパレスチナ人が交流する場でも、ガザの民間人住民への共感を表明するとたちまち、これまで自由な言論と統合の拠点であることを誇ってきた学長らにより放校処分を含む復讐にみまわれることもあった。

ガザで繰り広げられている悲劇は、今やほとんど理解しがたい。ナクバ（一九四八年のパレスチナ人の追放以来、あれほどの規模のことは起こったためしがないし、ガザのナクバはもっとひどい形で終わるのかもしれない。二〇〇〇万人近いガザの人々が居場所を追われ、住居やインフラストラクチャーはほぼ壊滅状態にされた。二〇二四年六月初頭時点で、すでに三万六〇〇〇人以上が殺されてその多くは子ども、さらに数千人が瓦礫の下に埋まり、八万人以上が負傷した。無理やり追われた住民——ほとんどが一九四八年の難民の子孫——が避難する地域は縮小し、そこでは深刻な人道危機が繰り広げられている。この人道上的カタストロフィは巨大なパラダイムシフトを起こしており、行方は見通せない。

他所でも書いたように、この危機の根はシオニズムの始まりと、ユダヤ人のパレスチナ人植に反応したパレスチナ民族運動の成長にまでさかのぼる。その歴史で最重要の契機は一九四八年の戦争とナクバであり、これはイスラエルのユダヤ人からはホロコースト後の国民的復活の瞬間として受け止められ、大方のパレスチナ人

からは、攻撃的でよく組織されよく支持された、国民的で人種者植民地主義的なシオニスト運動が勝利した後、民族的カタストロフィとして受け止められた。

過去についてのこのような二極化した認識は、現下の危機から抜け出す道を描く際にも決定的に重要である。確かに、この瞬間に私たちが目撃しているのは、リベラルなイスラエルのユダヤ人でさえその大半は、ガザにおける何万人もの無幸のハレスチナ犠牲者に何らかの共感を示すことがほぼ全面的にありえないという事態であり、他方、ハレスチナ人に加えられている暴力はきつと、イスラエルに復讐する思いを募らせた次世代の闘士を生み出すことだろう。それにもかかわらず、まさにこの破壊の規模ゆえに、そして一部の人々の抱く正常に戻りたいという願望にもかかわらず、事態が以前のようなことになることはありそうもない。パレスチナ問題はもはや操作可能ではなく、正面から向き合って解決されなければならないことは、誰であれ火を見るよりも明らかだろう。

だからといって、平和的解決策が手の届くところにあるわけではない。事態が悪からさらなる悪へと進むことも確かにありうる。権威主義と暴力の度合いを増すイスラエルの政権が、ユダヤ人住民のさらなる軍事化を見込んで、ハレスチナ問題を火と剣をもって解決する好機として利用することをめざすこともありうる。これは、イスラエルの民主主義の終焉を意味し、パレスチナ人には筆舌に尽くしがたい苦難をもたらすだろう。ますます孤立化して貧困化し、占領地のパレスチナ人と自国市民であるパレスチナ人の双方に不寛容で暴力的なイスラエルは、世界中の多くのユダヤ人の支持ともっとも近い同盟諸国の後ろ盾も失うだろう。長期的には内部矛盾に堪えられなくなりそうだが、それまでに巨大な苦痛と苦悩がユダヤ人とパレスチナ人の双方にふりかかることだろう。

だが、私たちが目に見えているパラダイムシフトは反対方向に進む可能性もある。いずれの側も勝利できない闘争の中では、ずつと転移を繰り返す暴力の循環を封じる別の道を見つけなければならないと双方が認めあうことによってである。中東の出来事がますます制御不能の兆候を示しているからこそ、政治的対案を希求する現地アクターへの国際圧力が高まることも期待できる。だが、パレスチナ問題を敷物の下に隠したかのようにして戦略的・経済的同盟を構築しようとした一〇月七日以前のアメリカ、イスラエル、サウジアラビアの試みとは異なり、この種の地域再編はパレスチナ人を含まねばならないことが、今や一点の曇りもなく明らかである。実際、中東における関係のこのような変革への関与を切望するアラブとヨーロッパの主要諸国が多くある。我が道を行くイランを孤立させ、ハマースを周辺化させ、より現実的で融和的なイスラエルの指導者の登場につながるような変革である。

過去数十年、イスラエル・パレスチナ紛争は、主として双方の宗教的狂信者によって動かされてきた。この種の熱狂的な人々というのは、危機と不安と絶望の時代にはびこり、物理的安全、物質的満足、希望が大きな時代には減るものである。イスラームとユダヤ教はともに依拠すべき長い中庸の歴史を有しており、過激主義ばかりだったわけではない。教育を改革し宗派間の和解を前進させるなかで、その歴史を呼び出すことが可能はずである。だが、このような変化はこの地域の政治・経済の変革次第であり、現在、多くの血を流すことで肥え太るユートピア的計画の名の下に、相互の狂乱を煽る過激主義者を捨て去れるかどうかにかかっている。この変革は、イスラエルのユダヤ人とパレスチナ人がともに、双方の失格した指導者によって社会にもたらされた巨大な殺戮と破壊を認識し正面から向き合うとともに、もう一度、今度は暴力依存症からの「酔い覚まし」をする能力に依拠するものとなるだろう。これは歴史上最初の事例ではあるまい。支配と復讐を求める狂信的な意志に囚われた諸国民が、彼らと彼らの敵が積み上げてきた瓦礫の山と向き合わなければならなかった場合もあった。自分たちの力の限界を受け入れることを余儀なくされ、平和の祝福を認識することを学んだこともあった。平和の味は勝利の味より甘美であることをしぶながら認めなければならなかった事例もある。征服と抑圧よりも断念と和解のなかでこそ強さははっきりと現れるものだし、子どもたちの未来への希望

はあれこれの神の名による殉教よりも深く感じられて永続的だということもある。私たちが努力すれば、このような転換もありうるのである。これは、追求するだけの価値のある目標である。

- 1 “The Elephant in the Room,” <https://sites.google.com/view/israel-elephant-in-the-room/petitions/aug-23-elephant-in-the-room?authuser=0> から引用。2023年11月7日以降に発せられた請願も掲載されており、バイデン合衆国大統領にイラク、アフガニスタン、シリアの武器供与停止を求めるものも含まれる。
- 2 例文は以下を参照。“Weaponizing Language: Misuses of Holocaust Memory and the Never Again Syndrome,” Council for Global Cooperation, March 12, 2021, <https://cginternational.co.in/weaponizing-language-misuses-of-holocaust-memory-and-the-never-again-syndrome/>; “A political stalemate led to the bloodshed in the Middle East. Only a political settlement can truly end it,” The Guardian, November 29, 2023, https://www.theguardian.com/commentisfree/2023/nov/29/israel-gaza-settlement-palestine-end-occupation?CMP=share_btn_tw; “The Hamas Attack and Israel’s War in Gaza,” Council for Global Cooperation, November 21, 2023, <https://cginternational.co.in/the-hamas-attack-and-israels-war-in-gaza/>; “What I Believe as a Historian of Genocide,” *New York Times*, November 10, 2023.

謝辞

以下の出版社及び雑誌が、以前、私の公刊した論文やエッセーを加筆・改変・短縮の上、本書に再録することを認めてくださったことに感謝したい。第一章は、*オムカシ Probing the Ethnics of Holocaust Culture*, edited by Claudio Fogu, Wulf Kansteiner, and Todd Presner (Cambridge, MA: Harvard University Press), 319–31 収録された“The Holocaust as Genocide: Experiential Uniqueness and Integrated History”であり、その内容と脚注についてくわすかの最新情報を加えた。copyright © 2016 by the president and fellows of Harvard College, used by permission, all rights reserved. 第二章は、“Eastern Europe as the Site of Genocide,” *Journal of Modern European History* 80, no. 3 (2008): 557–93 に加筆・改変した新版である。第三章は、“The Voice of Your Brother’s Blood: Reconstructing Genocide on the Local Level,” in *Jewish Histories of the Holocaust: New Transnational Approaches*, edited by Norman J. W. Goda (New York: Berghahn Books, 2014), 105–34 として加筆・改変した新版である。第四章は、“Wartime Lies and Other Testimonies: Jewish-Christian Relationships in Bucacz, 1939–44,” *East European Politics and Societies* 25, no. 3 (2011): 486–511 の加筆・改変新版である。第五章は、“Guilt and Accountability in the Postwar Courtroom: The Holocaust in Czortków and Buczacz, East Galicia, as Seen in West German Legal Discourse,” *Historical Reflections* 39, no. 2 (2013): 96–123 に加筆した新版である。第六章は“Criminalizing Denial as a Form of Erasure: The Polish-Ukrainian-Israeli Triangle,” in *Memory Laws and Historical Justice*, edited by Ariella Lang and Elazar Barkan (New York: Palgrave, 2022), 195–221 を改変したものである。第七章は“The Return of the Displaced: Ironies of the Jewish-Palestinian Nexus,

1939-1949," *Jewish Social Studies* 24, no. 3 (2019): 26-50 の加筆・改変版である。第八章は "My Twisted Way to Buczacz," in *The Holocaust: Voices of Scholars*, edited by Jolanta Abrosewicz-Jacobs (Cracow: Centre for Holocaust Studies, Jagiellonian University, Auschwitz-Birkenau State Museum, 2009), 95-104 に加筆・短縮した新版と未公開の論考 "Writing in the Diaspora" の加筆・短縮版をこなげたものである。第九章はエッセー "From Building a City to Demolishing Homes: Origins and Their Outcomes," *Tikkun—The Jewish, Interfaith and Secular Progressive Voice for Justice, Peace and Environmental Sanity* 33, no. 4 (2018): 62-65 以下からの部分 "From Buchach to Sheikh Muwannis: Building the Future and Erasing the Past," in *Dilemmas of Diversity After the Cold War: Analyses of "Cultural Difference" by U.S. and Russia-Based Scholars*, edited by Michele Rivkin-Fish and Elena Trubina (Washington, DC: Woodrow Wilson International Center for Scholars, 2010), 50-79 に加筆し大幅に短縮した新版 "National Narratives of Suffering and Victimhood: Methods and Ethics of Telling the Past as Personal Political History," in *The Holocaust and the Nakba*, edited by Bashir Bashir and Amos Goldberg (New York: Columbia University Press, 2019), 187-205 の加筆・短縮版を許諾の上、再録してまとめたものである。copyright © 2019 Columbia University Press, reprinted with permission of Columbia University Press.

目次

ホロコーストとジェノサイド

日本語版へのまえがき

謝辞

序章

第一部 残虐行為を書く

第一章 歴史上の唯一無二性と統合された歴史

第二章 ジェノサイドの場としての東ヨーロッパ

第二部 地域の歴史

第三章 地域からジェノサイドを再構成する

第四章 歴史文書としての証言

第三部 正義／司法と否定論

第五章 法廷のなかのホロコースト

第六章 忘却の道具としての記憶法

第四部 記憶の訪れる時

第七章 イスラエル・パレスチナにおける帰還と追放

第八章 私がたどったアウシュヴィツへの
捻れた道、そして帰路

第九章 過去を語って未来を築く

訳者あとがき

原注(略語一覽)

索引

283

229

211

191

163

129

93

71

31

13

1

オメル・バルトフ (Omer Bartov)

1954年生まれのエゲヤ系イスラエル人(アメリカ在住)。歴史学者。テル・アヴィヴ大学(学士、1979年)、オックスフォード大学(博士、1983年)を経て、現在ブラウン大学教授(ホロコースト・ジェノサイド研究)。第二次大戦期ドイツ国防軍の研究に始まり、ルーツであるガリツィア(西ウクライナ)のホロコーストをテーマとした一人称の歴史叙述や小説を執筆。著書に *Anatomy of a Genocide: The Life and Death of a Town Called Buczacz* (Simon & Schuster, 2018)、*The Butterfly and the Axe* (Amsterdam Publishers, 2023)、小説など多数。イスラエル・パレスチナ問題では人道的なオピニオンや社会活動、編著書 *Israel-Palestine: Lands and Peoples* (Berghahn, 2021) で知られる。

橋本伸也

1959年生まれ。京都大学大学院教育学研究科博士(後期課程)学修認定退学(博士(教育学))。現在、関西学院大学文学部教授。専門はロシア・東欧史、メモリー・スタディーズ。主な著書に『記憶の政治——ヨーロッパの歴史認識紛争』(岩波書店、2016)、『紛争化させられる過去——アジアとヨーロッパにおける歴史の政治化』(編著、岩波書店、2018)、訳書にコスチャシヨーフ『創造された「故郷」——ケーニヒスベルクからカリーニングラードへ』(共訳、岩波書店、2019)、ヤーラオシェ『灰燼のなかから——20世紀ヨーロッパ史の試み』上・下(人文書院、2022)など多数。

ホロコーストとジェノサイド

——ガリツィアの記憶からパレスチナの語りへ

オメル・バルトフ

2024年11月14日 第1刷発行

訳者 はしもとのふや
橋本伸也

発行者 坂本政謙

発行所 株式会社 岩波書店
〒104-8002 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
電話案内 03-5210-4000
<https://www.iwanami.co.jp/>

印刷・理想社 カバー・半七印刷 製本・牧製本

ISBN 978-4-00-061671-3 Printed in Japan

訳者あとがき

本書は、Omer Bartov, *Genocide, the Holocaust and Israel-Palestine: First-Person History in Times of Crisis*, London: Bloomsbury Publishing, 2023 を翻訳したものである。同書は、過去一五年ほどの旧稿を集成した全五部一章からなる論文集だが、訳出にあたっては、著者とも相談の上で第四部「人称の歴史」を削除し、関連する編集上の調整を行った。割愛した第四部は、ブラハ出身のユダヤ人作家・詩人であるハンス・ギュンター・アドラーの作品への批評にことよせつつ、本書の一方の舞台であるブチャチ出身のユダヤ人知識人や革命家の群像を扱ったものである。だが、紙幅上の事情に加えて、現在はウクライナ西部の街となったブチャチにおけるホロコーストを、直後にパレスチナで起こったアラブ系住民の追放（ナクバ）と接続して論じながら歴史学方法論の刷新もめざした本書で、この部分はやや協道の感があった。また、取り上げられた対象も日本の読者には馴染みが乏しく、日本語版への収録を見送ったというしだいである。その代わり新稿である「日本語版へのまえがき」を付して、原著出版直後から急展開中のパレスチナ／イスラエルにおける危機に関する著者の最新の見解を読者に届けることとした。書かれた内容は、二〇二一年刊行の論集 Omer Bartov (ed.), *Israel-Palestine: Lands and Peoples*, New York: Berghahn, 2021 のベーパーバック版（二〇二四年六月刊行）に追補された「ベーパーバック版へのまえがき」とかなり重なっており、現在進行形の人道上の危機を直視した著者による、世界と日本の読者に向けた端的だが切実な最新のメッセージとして読むことができる。「日本語版へのまえがき」には絶望の向こうにある未来への意思が貫かれているように思われるが、本書を通読することで、このような強靱な姿勢を生起させる著者の複雑な思考の軌跡を読み解くことができるであろう。

本書の原著者オメル・バルトフ教授は、独立からまもない一九五四年にイスラエルに生まれた歴史家である。現在は、アメリカ合衆国東北部の街ブロウディンズにあるブラウン大学でホロコースト及びジェノサイド・スタディーズ担当教授として講壇に立ち、世界レベルでこの分野の研究を主導する存在でもある。原著の表題からも示唆される通り、本書は、伝統的なホロコーストの話法を超えた新たな歴史叙述のあり方を追究する中で提唱された「一人称の歴史」の試みでもあり、その一事例として本書中の随所には、ブチャチからバレスチナに移住して難を逃れた著者の家族の歴史、「イスラエル第一世代(サツラ)」としての自己形成過程、ドイツ国防軍研究やホロコースト・ジェノサイド研究を経てイスラエル・パレスチナに回帰していった研究上の足取りなど、著者の人生の記憶が埋め込まれている。自分の家族の救済が他集団の大災厄と一体であった不条理への葛藤に貫かれたこの足跡の理解は本書の核心をなすものだから、ここでおさなりに著者の来歴を紹介したところで、読者自身が著者の紡ぐ思想圏を理解する妨げにしなければならないだろう。そこで以下では、二〇一七年七月以降の発言と行動の要点を記して紹介に代えたい。

二〇一七年七月七日のハマースによる突然の襲撃から一カ月余、すでにイスラエルがガザ地区で大規模な軍事作戦を展開して一万人余の民間人犠牲者を出す一方、合衆国の世論と政治がイスラエル支持を明確に打ち出していた一〇月一日、バルトフ教授は、「ニューヨーク・タイムズ」紙に、「ジェノサイド史家としての私の信じること」と題する「オピニオン」を寄稿した。ガザ地区でイスラエルの展開する作戦が「擁護困難な人道危機」を出来させたこと、すでに戦争犯罪や人道に対する罪を起こした可能性があることを指弾するとともに、イスラエルの政治・軍事エリート中にジェノサイド的意図を抱き、公然とそれを表明する者もいることを提示したのである。だが、それでもなおこの「オピニオン」は、国際法上の厳格な要件に即してジェノサイド

と断定することには慎重な姿勢を示した。「ジェノサイドは、現に起きてから選ればせで非難するより、発生以前にその潜在的可能性に警鐘を鳴らすことが決定的に重要であることを私たちは歴史から知っている。この時点では、イスラエルがみずからの行動をジェノサイド化するのを阻止する時間はまだある。これ以上一刻も待てない。いままさに一線を越えてジェノサイドに踏み込む瀬戸際にあることに警鐘を鳴らし、世界に向けて抑止のための努力を呼びかけたのである。

この時点で、またジェノサイドではないとする発言を宥和的で微温的と捉える向きもあるだろう。だが、過去四半世紀にわたりジェノサイド概念が世界各国で、ホヒュリスト的な政治の道具として軽々しく恣意的に濫用されて相互の不信や憎悪が昂進させられ、それゆえにかえって「ジェノサイド」の実相への理解が損なわれる風潮を憂慮してきた訳者の目には、拙速な断定やフロバガンダ的話法に起因する反発を回避しつつ、世論を説得してイスラエルのさらなる軍事行動を封じることには賭けたギリギリの判断であるように映った。

もとより、バルトフ教授の思慮深い呼びかけも虚しく、その後の展開はこれを一顧だにすることなしに推移して、数カ月後には教授自身もはやジェノサイドと呼ばざるをえない状況に立ち至った。だが、初発時点の抑制的態度は訳者には、ジェノサイド研究の豊富な知見を裏付けに社会に向けて発言する理性的な知識人としてのバルトフ教授への敬意と信頼を生んだ。同じ理由かどうかはともかく、この「オピニオン」は世界で広く注目された。日本でも二〇一四年一月二〇日に放送されたNHKのE TV特集「ガザ——私たちは何を日撃しているのか」でインタヴュー映像が放映されただけでなく半年後、七月六日のNHK国際放送でも続報があった。 <https://www3.nhk.or.jp/nhkworld/en/shows/3026008/>で視聴可能)、各国のマスメディアからの取材が引きも切らず続いている。

たまたま訳者に多少の馴染みのある事例では、エストニアの週刊紙『鎌』(二〇一四年五月二五日号)に掲載された「イスラエルを奈落から引き戻す必要がある」と題した長いインタヴュー記事が目を引く。現在の危機の

起源を一九四八年から説き起こす記事の末尾でバルトフ教授は、ホロコーストをはじめ多大の犠牲を教訓に生まれた国際人道法の意味の喪失を望まぬのなら、そしてイスラエルが標榜する「悪に対する人類の勝利」を辞義通り達成するには、当のイスラエルをジェノサイド条約に即して裁く必要があると断じている。運動論的な糾弾としてジェノサイドを持ち出すのではなく、国際司法の權威と法理の正統性を賭けた処断を求めたのである。上述の警句から半年余、その間に積み上がる犠牲と破壊にもかかわらず欧米主要国がイスラエル支持の態度を頑なに維持する一方、南アフリカが国際司法裁判所にジェノサイド条約違反でイスラエルを提訴し、同裁判所はジェノサイド抑止のための暫定措置を命じた。国際刑事裁判所の主任検察官は、ハマース幹部らと並んでイスラエルのネタニヤフ首相らへの逮捕状請求を行った。いまだ解決への道のりは見通せぬとはいえ、ジェノサイド抑止を求めて世界は動いている。

この後、バルトフ教授は六月後半に一年ぶりでイスラエルに一時帰国して現地の生の空気に触れた。怒濤のような憎悪に身を晒したというほうが真相に近いかもしれない。その様子は、『ニューヨーク』誌七月二日号のインタヴュー記事「ホロコースト研究者、イスラエルの予備役兵に会う」がいち早く伝え、翌月には本人がイギリスの『ガーディアン』紙八月三日号に、「元イスラエル国防軍兵士でありジェノサイドの歴史家である私は、最近イスラエルを訪れて、深く心をかき乱された」と題する長文のエッセーを寄稿した。

バルトフ教授によれば、一年ぶりに訪れた故郷は、私が知っていたのとは違う国になっていた。ハマースによる襲撃と虜囚のためにイスラエル社会は、怒りと恐れがあいまって、どれほどコストを払っても安全を取り戻したいという願望とともに、政治的解決や交渉や和解への完全な不信に陥っており、自己目的化した戦争のために自滅に向かいかねぬ様相だった。他方、ガザ地区住民への共感の余地は完全に消失し、その場で実際に何が起きているのかを知ろうとも思わない。テレビの報道は自国軍兵士の犠牲とハマースの兵士を殲滅した戦果ばかりで、民間人の犠牲、とりわけ多数の子どもの死はまず伝えられない。久方ぶりに

再会した友人たちは、長く国外に暮らして心の痛みを共有しえない外来者によって悲嘆の思いを遮られることを恐れて心を閉ざした。イスラエルの不正義を認識する左派リベラルだったはずの人々さえ、イスラエル国家の存在という大義がパレスチナ人の大義に優越し、勝利しなければならぬと信じている。無慈悲な攻撃に晒された他者の被る痛みをともに語る可能性はそこには乏しかった。

六月十九日、バルトフ教授はペンシロクリオン大学の講義室に向かった。旧知の教授が、バルトフ教授を演者にもハナハを企画したのである。世界各地の大学キャンパスで展開するイスラエルへの抗議運動に連なってガザの戦争を論じ、イスラエルへの抗議運動は「反ユダヤ主義」が動機だとする主張に疑義を呈するのが当初の意図だった。

講義室に向かうと入口周辺に学生たちが屯っていた。聴講ではなく阻止のために呼び集められたことが明らかだった。こんなことは許さない、といったいつまで裏切り行為を続けるのか。裏切りとは、イスラエルによるアハルトヘイト体制を批判する請願に署名し、『ニューヨーク・タイムズ』でジェノサイドの可能性に警鐘を鳴らしたことだった。

一時間にわたる押し問答の末、講演ではなく学生たちと「対話」することで決着、極右組織の活動家でもある学生たちが入室して延々二時間にわたる「対話」が始まった。入室した若い男女の多くは、予備役兵としてガザ地区に派兵され、戦闘の日々を経て最近やっと大学に戻ったばかりだった。彼ら彼女らは、イスラエルの大学生の典型ではないが、国内世論の気分を反映してはいた。騒然たる状況の中にバルトフ教授は、「若い世代の学生や兵士たちの心性を理解する手がかり」を見出している。

腰かけて話しはじめた途端にわかったのは、学生たちが自分たちのことばに耳を傾けてほしいと切望していることだった。ある女子学生は演壇に飛び上がって、失った友人やハマースの暴虐について語ったが、途中で取り乱して泣き出してしまった。冷静ではっきりとした口調のある男子学生は、イスラエル批判は必ずしも反

ユダヤ主義ではないとの示唆に抗弁してシオニズムの歴史と大義を論じ、異教徒に否定される謂れなどないと言った。学生たちを特に激昂させたのは、ジェノサイドへの警鐘だった。イスラエル国防軍は世界で最も道徳的な軍隊であり、戦地に赴いた自分たちは殺戮者などではない。多数の子どもらが命を奪われ、学校や病院や公共施設が爆撃に晒されるとしても、それはひとえにハマースの責任だ。ガザの大量破壊のただなかに身を置いた予備役兵Ⅱ学生が、国家指導者による正当化の「論理」そのままに、ハマースとナチスとの(誤った)アナロジーで無差別の破壊と殺戮を正当化する様子にバルトフ教授は、第二次世界大戦でドイツ人兵士が残虐行為に走り、これを正当化した姿を重ねていた。戦争の現場における兵士の「野蛮化」は若き日にバルトフ教授が取り組んだテーマであり、その結論だった。

本書にも書かれた兵役経験を聞かされて多少落ち着いたとはいえ、激怒し取り憑かれたように語り続ける若者たちの姿にバルトフ教授は、周囲のすべてに裏切られたかのような感情の表出を看取している。あまりに批判的に思えるメディア、戦場でハレスチナ人に「寛大」過ぎる上官兵士と民間人の区別なく闇裏に発砲するのを制止されたのだろうか。一月七日の襲撃を阻止できなかった政府。完全勝利できずにいる国防軍の無能。いわれなき批判を産ぶ知識人や左翼。十分な武器弾薬を供給してくれない合衆国政府。ヨーロッパの偽善的政治家と反ユダヤ主義的な学生運動。怯え、不安を抱き、混乱しきって何かを訴える学生たちはPTSDに苦しんでいる。とバルトフ教授はいう。実際、スマートフォンに残された画像を示して、「ガザに飢餓なんてない。僕たちの部隊はありったけの食料をこの子どもたちにあげたのだから」と自家撞着的に強弁する姿は、ガザの戦場が残した錯乱の傷と自己正当化への衝動を余すところなく物語る。そして、閉ざされた思考回路による狂騒と興奮と混乱のもと、国家指導者が仄めかしたジェノサイド的意図が刻々と現実化していった。惨憺たる光景にしばし打ちひしがれて合衆国に戻ったバルトフ教授は、気を取り直して詩人エルダンの言葉で寄稿文の最後を飾っている。「闇の轟く時があっても、夜明けと輝きはある」。

バルトフ教授が伝えるイスラエル国内の今の光景は実に貴重である。統制され、特定場面に限定された報道からは知りえぬ戦争の実相が伝わるからである。戦争とホロコーストの「現場」の力学と、その場に居合わせた者たちの振る舞いを知悉するバルトフ教授だからこそ捉えられた若き元兵士たちの言動には、私たちが戦争とジェノサイドについて考えるための示唆が多く含まれている。同時に、取り乱す学生たちを落ち着かせ、意味ある言葉を聴きとることできたバルトフ教授の人間理解の技法にも、学ぶべきことが多くある。本書で東欧とハレスチナを結んだ構想力が、眼前の戦争の真相を見きわめる可能性を開いている。

* * *

久しく中東欧・バルト諸国とロシアにおける「記憶の政治」に取り組んできた訳者は、日本におけるホロコースト記憶の扱われ方に割り切れない思いを抱いてきた。「過去の克服」「記憶文化」「歴史修正主義」などの言葉を駆使してドイツと日本の過去への向き合い方を対比的に論じる一方、アウシュヴィツ以外のホロコーストの現場にあまり関心の向かわぬ様子には苛立たしさも感じた(例外的に野村真理の仕事がある)。ホロコーストの「唯一無二性」を鶴呑みにし、現代ヨーロッパにおける国際政治の道具としてホロコースト記憶が駆動させられる動態とその意味を捉え損ね、ひいてはホロコーストと深く繋がったパレスチナ/イスラエルの「今」(すでに七年以上継続した「今」を視野の外に放置した西洋史学界の様子には、本当にこれで良いのか)の思いが募っている。その思いを込めて、「二〇二三年前半に公表した複数の小論で「ホロコースト記憶の特権化がもっとも深刻な影を落としたのがパレスチナ問題である」と書いた(「歴史」の書かれ方と「記憶」のされ方——人々はなぜ過去をめぐって争いを起こすのか)「歴史評論」第八七八号、二〇二三年、など)。ホロコースト記憶とナクバの記憶の接続可能性、両者の接続を阻害する世界規模の「記憶の政治」の構図、その磁場のもとに置かれた従来の歴史学や社会科学におけるナチやホロコーストの扱いに潜む重大な瑕疵、これらの問いに本気で取り組まねば

に記す。本書第八章最後の箴言風の一段落とその末尾に刻まれた「おそらく、フィクションにも帰還すべき時
がきたようである(二二六頁)」という言葉は、これを踏まえてはじめて理解可能である。

最後に、ウクライナとイスラエルの記憶法と両国の記憶政治の複雑な関係が論じられた点も意義深い。両国
はともに現代世界を揺るがす二つの戦争の当事国だからである。「専門家」の中には、二つの戦争はそれぞれ
独立し相互の関係など存在しないかのように主張する向きもあるらしいが、直接の因果関係は認められぬにせ
よ、両者を無関係とするのは事態を読み損ねていると思う。これら二つの戦争はともに、「ファシスト」「ナ
チ」などの第二次世界大戦とホロコーストに由来する記号を駆使して戦われ、過去についての集合的表象を総
動員する「記憶の政治」の強固な磁場がそれらに共通する前提である。ウクライナとイスラエルを支持し支援
するかどうかは、そのまま国際的な分断の構図とも重なる。何よりイスラエルは、ウクライナなどから来た
「ロシア・ユダヤ人が作った国」(鶴見太郎)である。現代世界で戦争を生み出す磁場の様相を理解する手がかり
を本書は与えている。

* * *

ウクライナと東欧には多少の知識があるにしても、パレスチナ イスラエルについては初学者以前でアラビ
ア語とヘブライ語の文字さえわからぬ訳者には、「サブラ」の語や地名・人名をはじめ手に負えない難題が多
くあった。それらの不明点を「一覧表」にして教示を乞うた岡真理さん(早稲田大学、現代アラブ文学)と鶴見太郎さ
ん(東京大学、ロシア・ユダヤ史)、ドイツ刑法と裁判所のことを問い合わせた高山佳奈子さん(京都大学、刑法学)、
ドイツとポーランドについて教えてくださった藤原辰史さん(京都大学、食と農業の歴史)と吉岡潤さん(津田塾大
学、ポーランド現代史)など、何人もの方々の手を煩わせてなんとか作業を進めることができた。心よりお礼申
し上げたい。

バルトフさんとは頻繁にメールを交換し、細々とした記述についてしつこく問い合わせた。おそらく文学的
修辭が縦横無尽に凝らされているためだろうが、原著は、一読した際にはなんとなくわかつた気にはなっても、
いざ忠実に日本語に直そうとした瞬間に七転八倒する難解さだった。読者側の相当の知識を前提とした書き振
りも、訳出に当たり困難な点だった。事細かに補う方便もあったかもしれないが、バルトフさんの思考過程を
そのまま追体験するほうが大事だと考え、補足は最低限に抑えた。読者にとって読んで読みやすい訳書にな
らなかつたかもしれないが、丁寧に対応してくださったバルトフさんに感謝とともにお詫びしなければならな
い。

最後に、本書は、岩波書店編集部の上橋聖名さんの全面的な理解と支援のおかげで世に送り出すことができ
た。本書の持つ価値をいち早く認識して、すっかりバルトフ「推し」になってしまわれた上橋さんの熱意に心
から感謝申し上げたい。

二〇二四年九月二十五日

橋本伸也